

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日  
令和元年九月一日発刊  
百二十二卷第九号

# ホトトギス

九月号



## 風雅の小筥〔二十〕

廣太郎

今回は俳論というより、何か以前時々掲載されていた「読者諸氏へ」的な内容になってしまふ事を御了承頂きたいが、令和元年七月号、八月号で通知した通りホトトギス社は長年通い慣れた東京駅前の、日本一ともいえるオフィス街丸の内から遂に離れる事になった。これを書いている令和元年六月十二日時点では未だ転居の準備段階であるが、明治三十年松山で創刊して、次の年十月からは当時は東京市の神田に発行所を移し、明治三十四年九月からは同じ東京市の麹町区、明治四十三年十二月からは芝区、大正二年からは牛込区、そして大正十二年一月二十六日という記録になつてはいるが、当時は東京市麹町区永楽町一・一という住所であつた丸ビルに転居して、所謂現在の丸の内にオフィスを構える事となつたのである。丸ビルの中でも、年月は割愛するが、六二三区、六〇三区、七二三区、八七六区、七五三区、五五三区と転居し、平成八年五月から東銀ビル、そして平成十八年九月から三菱ビルに転居し、結局丸の内では九十六年という歳月を過ごした事になる。百年を視野にといい考えもあつたが、やはり現在のホトトギス社の状態では致し方の無い事態である事を是非御理解頂きたいのである。考えてみれば、前述ホトトギスの発行所を羅列したが、御覧頂いてお判りの通り高濱虚子が東京で最初に発行した場所が神田である。虚子が東京でホトトギスを引き継ぐにあたり、やはり尋常でない危機感があつた事も想像に難くない。そう、これはホトトギス背水の陣である事を読者の皆様にも是非御理解頂きたいのである。

句日記 汀子

平成三十年九月二日 芦屋ホトトギス会

七草の揃はぬこともそれらしく  
一人又一一人終りぬ夏休  
颱風の先の先とてあなどれず  
新涼の旅は期待の中にあ

九月二日 下萌句会

ダイエツト口にしつつも夜食とる  
これより山がかかる道草の花  
秋晴を待つ心切予定組む  
不覚にも病院通ひ草の花  
胡蝶蘭白し悲しみ深かりし

九月三日 ロイヤル俳壇

あなどれぬ進路台風情報に  
待宵や雲退けて退けて  
台風の颯に追はるる家居かな  
蓑虫に蓑の好みのあるらしく

九月十一日 大阪倶楽部

花野には風強き日となりけり  
台風に外出あきらめたることも  
露に濡れ来し客人をねぎらひも  
三瓶野の露を踏み来し旅の靴  
お互ひに懐ふは台風のこと  
台風も地震も一消息として

九月十一日 綿業倶楽部

押し寄せし霧に捉はれぬし山路  
嵐去り月天心にとどまれり  
山霧に暮る不安を分ち合ふ  
山路来て霧の集まるところかな  
月の帰路いつもの如くありしこと

九月十三日 清交社

芋虫の所在に気づきをりしより  
鶏頭に寄せる忌日の巡り来し  
秋灯下繙く一書置かれあり  
旅の留守秋灯一つ点し置く  
芋虫の通りし跡の残りけり  
鶏頭の五本が十本にも見ゆる  
稿債の積まれし机上秋灯

九月十四日 工業倶楽部

露けしや人の命の重さふと  
芋虫の居るを気づきてをりし人  
草の露踏み分けて来し旅の靴  
三瓶野の露に濡れ来し人集ふ  
これよりの露けき日々を思ひつつ

九月十六日 日本伝統俳句協会全国大会

秋晴を願へば叶ふことも旅  
爽やかに訪へば次々人親し  
虫の音を聞く耳となりゆけるかな  
昨日伊予今日は難波の秋の風  
一つづつ会終へて秋惜みけり

九月十八日 有恒俳句会

露踏みてえにしの浜に心置く  
旅心露の祖の地を踏みて来し  
露けしや旅終へ次の旅のこと  
昨日より今日の快晴露けしや  
露踏みて来し旅の靴置かれあり  
怪我癒えていつもの如くある夜長

九月十九日 句会と講演の会

松山の話も少し獺祭忌  
獺祭忌俳句のえにしとて集ふ  
子規忌とて集ふ満席なりしこと

九月二十日 時雨句会

哀愁の声につきゆく風の盆  
糸瓜忌を済ませ旅又旅の日々  
コスモスの揺れて風より立ち上がる  
糸瓜忌の過ぎていつもの如くあり  
九月二十一日 アネモネ句会

霧深き山路怖れて運転す  
忙しきときも手抜きをなき夜食  
目的は夜食と知つてをりにけり  
サポートを外し夜食を平らげし  
山霧の流るる視界正しつづつ  
霧抜けて又霧抜けて山路ゆく  
九月二十二日 祝「玄海」三百号

九月二十六日 夏潮句会

コスモスに風の攪乱ありにけり  
いつの間に降り出してぬし秋の雨  
敦煌の旅の夕月忘れぬや  
欠席の替りに鉢の秋桜  
降り出して拾へぬ車秋の宵  
内緒ごとありコスモスの咲いてをり

九月二十七日 きさらぎ会

山荘の暮しの一部霧の朝  
蜻蛉の空蜻蛉に明け渡す  
台風の端の来てゐる空の旅  
六甲の霧の山路を語らばや  
霧晴れてこんな近くに海の景

九月二十九日 北信越ホトトギス俳句大会前日句会

台風の進路に迷ひありしこと  
台風キャンセル幾つありしこと  
なつかしき旅はるけしや薄紅葉

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成三十年九月一日 青嵐会ホトギス会

日の本の第五楽章虫時雨  
新涼の風に癒えゆく腕かな  
七草や二人の忌日近付けて  
颱風の中決断を迫られし

九月二日 野分会青嵐例会

還暦を過ぎ敬老の日を如何に  
秋蝶の舞忌心を包み込み  
じわじわと敬老の日を意識して  
早世の君秋蝶となりて舞ふ

九月二日 青嵐会青嵐例会

蚊帳の景百年といふ時を守り  
木道の一步花野の風となる  
賑やかに来て穏やかに花野人  
君追へば花野に溶けてゆきにけり

九月四日 カトリック新聞選者時

寿ぎの心を回す扇風機

九月六日 蕉心会

颱風に地震に列島縮こまる  
秋暑し女性ばかりの喫煙所  
地動説信じたくなき残暑かな  
蕉像の影蜻蛉の寄辺かな  
昨夜星に磨かれて水澄みにけり  
屋の虫災禍を嘆くかに鳴けり  
穴まどひ言うてしまへば楽なのに  
颱風に翻弄されし恙の手

九月七日 六甲会

鶏頭を活けて根岸の一忌日  
鶏頭に塗り替へられゆく忌日  
ローマへと露けき日本後にして  
転倒といふ露の身をひた隠し  
童顔の茅舎は露の身を捧げ

九月十日 朝日カレッジ若草句会

コスモスに日矢の尖つてをりにけり  
秋の声地より湧き出る副都心  
リーデルのワイングラスに秋の声  
竹林の百幹といふ秋の声  
コノモスや守りたくなる君のこと  
秋の蚊を払ひ年尾を見舞ひし日  
葛の花風を拒んでゐる葉裏

九月十三日 土筆会

耳元といふ秋の蚊の主張かな  
ボルードの赤に拘る月の友  
月見船二万六千噸の宴  
会社出しより爽やかに道迷ふ  
秋の蚊を払ひ年尾を見舞ひし日  
葛の花風を拒んでゐる葉裏

九月十五日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

子規虚子の息吹を今に伊予の秋  
伊予を恋ふ虚子の句碑より秋の声  
しまなみの橋の彼方に秋の声

九月十八日 北國文芸選者時

里山を膨らませゆく竹の春  
列島の季節裏返して野分  
君活けてこそ子規忌供華てふ気品

九月十九日 ホトギス社句会

野分後てふ三瓶野の夜空はも  
衣被つて登高会  
衣被つると里を語り初む  
揺るるとき孤独眩くねこじやし  
ねこじやし遊び心の揺れてをり  
衣被だけの藻塩と決めてをり  
屋根叩く音に雨月と気づくまで

九月二十日 登高会

冬浪に四半世紀を漕ぎ出せり  
その中に群れて孤高の曼珠沙華  
曼珠沙華黄泉の扉を開きゆく

九月二十三日 青嵐会東京例会

秋天に歪められたるタワ一の秀  
びしびしと芝生の露の弾けゆく

九月二十三日 野分会東京例会

敬老の日より仮面を脱ぐ二人  
敬老の日より秋蝶群れたがる  
早世の父敬老の日を知らず  
敬老の日やハラインを近付けて

九月二十四日 日本伝統俳句協会関東支部茨城県郡部会

爽やかに甦りたるワイナリー  
秋灯下ワインの歴史語る蔵  
この国のワインの未来葡萄園  
竹の春よりワイナリー開けゆく  
ワイン買ひ過ぎて冷やかなる財布

九月二十五日 若水句会

菜虫とり風は力を緩めたる  
芋を煮て昔と出会ふ厨かな  
芋剥く指の躍つてをりにけり  
今日も飲むワイン良夜に託けて  
ワイン蔵出れば良夜の微笑めり  
とぼとぼと良夜の道を一人かな  
菜虫ととぼとぼと星歌ひ出すまでは

九月二十六日 目黒学園句会

雁の竿山手線を俯瞰して  
冷やかに百年物のワイン樽  
枝やかに来て冷やかに話し出す  
棧豆や丹波の風を纏ひつつ  
冷やかに安置されたるマリア像  
吊橋を渡る冷やかなる蹠

九月二十七日 静の会

漆黒といふ名月の舞台かな  
初紅葉雨に色づく仔細かな  
子規の文字灯下親しく囁けり  
句碑の文字より虚子の声秋の声

九月二十九日 北信越ホトギス大会

# 雑詠

## 廣太郎 選

幸せや明日香の風でする落花 神戸 後藤比奈夫  
 甘樫の丘を喜び石鹼玉 同  
 落花繽紛蘇我の館と聞くからに 同  
 よく食べてよく寝て花を見て吉野 長岡 安原 葉  
 一陣の風の落花を浴び尽す 同  
 一句会また一句会花の宿 同  
 夫送りけふ母送り春の逝く 香川 三宅久美子  
 春霖やまだ暖かき骨を抱く 同  
 春の雨上がり父待つ天上へ 同  
 保育所の矢車のみの日曜日 京都 山崎貴子  
 矢車の軽き音立て風過ぐる 同  
 踊る様伏目がちなる踊子草 同  
 揚雲雀残して地球回るなり 相模原 木村享史  
 雲雀落つ回る地球を追ひかけて 同  
 初花を仰ぐときめき老にあり 同  
 天上に花会堂にオラトリオ 熊本 岩岡中正  
 旅にあるごと花冷の二三日 同  
 花の下遠流のごとく居りにけり 同

ひとり居のワイン春愁甘やかす 東京 田丸千種  
 AIの話新茶を汲みに立つ 同  
 走り梅雨一木一草なき質屋 同  
 百年の木の根踏み越え花の門 神戸 山田佳乃  
 水平線溶けて黄砂のひといろに 同  
 新築のまづパンジーを植ゑる庭 同  
 此やこの天下の神田祭かな 同  
 三越に祭提灯ひとならび 同  
 鱧の字の大き江戸前天麩羅屋 同  
 み吉野の花の余白を埋めて花 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 み吉野の闇を鎮めて桜かな 同  
 ともに花仰ぎ人生重ねゆく 同  
 乗り遅れたる風を追ふ落花かな 香川 湯川 雅  
 一羽なら影と番ひに蝶の昼 同  
 船よりも島退りつつ瀬戸霞む 同  
 時ならぬ虹かかりたる義仲忌 神戸 千原叡子  
 蕉堂へ侍りてよりの義仲忌 同  
 輪廻とは我が一世にも義仲忌 同  
 弱さうな猿と目の合ふ残暑かな 東京 今井肖子  
 秋の声象のはな子の居た時間 同  
 秋蝉のこゑのねぢれてゆきにけり 同  
 朝八時高知の蟻のはや登城 同  
 母の日も朝市守る土佐の母 同  
 普段着は普段着なりに更衣 同  
 同 大久保白村

## 雑詠句評（八月号より）

端切つぎ合せ夏めく布巾出来 神戸 後藤比奈夫

端切れをつぎ合わせて布巾を作る。昔は端切れであつても「もつたない」ものとして大切に使い尽くしていたけれども、昨今の大量消費の時代のせいで物を大切に使うという心が希薄になつてしまつたような気がする。「継ぎ接ぎ」をお洒落に言えば「パッチワーク」なのだろう。しかし「つぎ合わせる」という措辞に作者のこだわりがあるように感じられる。

「夏めく布巾」とは、色々な色を取り合わせたものが涼しげに調和したものなのだろう。一枚の布巾にときめくような美しさを見出した作者の喜びが伝わつて来る。（佳乃）

布巾や雑巾は、よくその家にある古い端切等を縫い合わせて作つた記憶があり、筆者も小学生の時の宿題で雑巾を作つた。家にあつた古いタオルをミシンで縫い合わせるのである。それが楽しくて、大量に作り過ぎて叱られた記憶もある。夏めく布巾という言葉が涼し気に響いている。（廣太郎）

海底に大和あるまま波おぼろ 神戸 藤井啓子

春の夜朦朧とした感じがおぼろである。掲句は波がおぼろと言う。海底に沈む戦艦「やまと」の上に繰り返される波のうねり。もしこの沈没船が引き上げられたらと思つと……。これはこれで夢おぼろである。（くに彦）

大日本帝国海軍の戦艦「大和」は、昭和二十年四月七日九州南方で撃沈され、今もその残骸は海底に沈んでおり、何年か前潜水艇が撮影したテレビ番組も見ただ記憶がある。世界最大の戦艦で当時は日本海軍の誇りでもあつたが、やはり戦争の愚かさが、この句の季題からひしひしと伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

子選

匍匐せる猫に気付かず雀の子 神戸 千原叡子  
 成るやうになるを諾ひあたたかし 同  
 日の恵み土の恵みに冬耕す 東京 稲畑廣太郎  
 京野菜育て百年冬耕す 同  
 瑞兆は令和にありて風光る 神戸 和田華凜  
 地車にぞぶ濡れといふ勇姿あり 同  
 かにかくに弘川寺にちるさくら 同 後藤比奈夫  
 閑かにも西行堂を包む花 同  
 病よき佳人迎へて句座のどか 長岡 安原 葉  
 春暁の裏木戸出しは美奇さんか 同  
 虚子遺墨拝してよりの竹の秋 千葉 大木さつき  
 一山を水音綴れる梅日和 同  
 改元 の 十連 休 も 花心 東京 今井千鶴子  
 日本の甘ささらりと桜餅 同  
 ふらここのを漕ぐ子漕げぬ子皆笑顔 同 河野昭彦  
 ふらここの子の背押しやる日曜日 同  
 母の声春の眠りの底にきく 同 高濱朋子  
 雪柳風の自在を目のあたり 同

皮脱いで令和の竹となりにけり 神戸 三村純也  
 今年竹令和の空へ伸びてゆく 同  
 歳月に落花に追はれぬるやうな 熊本 岩岡中正  
 詠めとこそ花屑の降りくる句帳 同  
 一輪の先に一輪初桜 東京 山田閨子  
 語るまじ云ふまじ花の闇のこと 同  
 雀の子そつちの水は汚いぞ 神戸 浜崎素粒子  
 雀の子雀色して軒先に 同  
 虚子忌過ぎとしあつ忌過ぎ美奇忌過ぐ 東京 大久保白村  
 美奇さんは春眠中と思ひたし 同  
 大いなる春の行きたるあと虚ろ 群馬 中杉隆世  
 やゝありて雉子は二声しか鳴かず 同  
 家持を詠みし虚子句碑海おぼろ 金沢 藤浦昭代  
 初夏やいよよ令和の朝ぼらけ 同  
 春愁を口にするより消えてをり 宝塚 水田むつみ  
 旬日を花に満たされきし生活 同  
 八月を灼き尽したる太陽よ 東京 今井肖子  
 八月尽ゆるびきつたる体かな 同